
ニュースキャスター

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニユースキャスター

【Nコード】

N2815G

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

傲慢極まる態度で世論をミスリードしようとするキャスター達。しかしインターネットが発達するようになって彼等の仮面が暴かれていき。実在の人物及び団体とは関係ありません。

第一章

ニユースキャスター

「結局あれなんですよ」

今日もテレビで傲慢な上から目線で話している。

「七十代に選挙権を与えたら駄目なんですよ。与党に票を入れますからね」

似合わないチヨビ髭にミスタースポックを醜悪に描いたような顔をしたスーツの男が言っていた。彼の職業はニユースキャスターである。

「全く何考えてるんでしょうね。やっぱり歳がいったらばけるんでしょうね」

「そうですね。処置なしです」

その男の言葉に顔だけはいいい女のキャスターが応える。これがこの番組の定番のやり取りだった。

この番組はニユース番組であったがこの看板キャスター二人のおかげでバラエティー番組の如き人気を博していた。この男のキャスター、名前を桑春樹というがこの男が中心になっていた。

女のキャスターは古宮陽子という。脚が奇麗なことで有名だ。なお離婚歴がある。

そこにこのテレビ局の親会社の編集委員が出て来てご高説を垂れる。長い間それでやって来ていた。この日もこの編集委員、巢型健三郎が吠えていた。

「軍靴の足音が聞こえます」

彼のいつもの言葉であった。まだ若いこの男は東大法学部から新聞社に入社した。まだ四十代だが編集委員になった所謂エリートである。

「与党はいつもそうなんですよ。教科書だってそうでしたよね」

「はい、国民の知らない間に変えていましたね」

「それです」

何故かここで教科書の話をし糸がそれに応える。

「国民が気付かない間に侵略を進出と書き換え」

「僕達が気付いたからよかったものの」

「全くです」

やはり上から目線だ。なおこの教科書の話であるが侵略と進出と書き換えたというくだりは誤報である。後にそれが週刊誌で指摘されある大学教授がこの新聞社に公開質問状を叩きつけ総合雑誌で堂々と批判を展開したこともある。しかし新聞社もこの面々もそれをなかったこととして今ここで話をしているのである。

「さて、その与党ですけど」

「まだやっていますね」

「そうなんですよ」

こう言うのは巢型であつた。

「増税も考えていますしね」

「また知らないうちに通そうとしているんですね」

「そういうことです」

そもそもそれは常に国会で中継され話に出ているのだがそれは言わない。そうしたところもまたしてもかなり傲慢でありかつ恣意的である。

「庶民の生活を圧迫しますね」

「そういうことしか考えていないんですよ」

「はあ」

糸がここでわざとらしく嘆息する。

「全く。政治家はもっと庶民のことを考えないと」

「それが政治家の仕事ですよ」

「何の為にやっているんですかね」

糸は古宮の言葉に応えてもっともらしく言ってみせた。

「政治をもっと庶民の目線でしないと駄目ですね」

「それができないから駄目なんですよ」

「処置なしです」

巢型も古宮も言う。こんな調子であった。

そして番組の最後の方で経済をやっていてである。株価の話が出ていたがここでアメリカの動向が語られる。アメリカの自動車産業の減収が述べられここで条は満面の笑顔で言い放ったのであった。

「日本の株価はこれで下がりますね」

こんな調子であった。こうして番組をやっていた。長い間多くの人間がこの番組の報道を疑っていなかった。中には懐疑的な目を向けて批判する者もいたがそれは少数派であった。週刊誌や保守系の総合雑誌で言われる程度であった。だから多くの人間はそれについて不思議に思うことも奇妙に思うこともなかった。

ところがであった。インターネットができてそれで多くの人間の意見が出て来た。これによりこの番組のおかしな点が検証されていた。

「昨日の条の発言は何だ？」

「古宮意図的に間違えてるのか？」

「巢型何時まであれを虚報だと言わないんだ？」

「おかしいなんてものじゃないよな」

「っていうか異常だろ？あの番組」

みんなで言い合う。とにかくこの番組のおかしな点がネットで検証されたのだ。

こんな話もあった。サッカーである国が日本と試合をした。条は日本が勝った時にこう言ったのだ。

「日本が勝ちましたね。ちっ」

これはネットで実況されている掲示板があった。所謂超巨大掲示板であるがここで実況されながら早速問題になったのであった。

第二章

「ハア！？日本が勝ったのに舌打ちか！？」

「こいつ何考えてるんだ！？」

「つていつか何様なんだよ」

「柔地獄に落ちろよ」

怒りの書き込みが矢次ぎ早に書き込まれていく。

「日本の選手は正々堂々と戦い勝っただろうが」

「あの連中なんて審判買収して反則までやってな」

「ああ、あれな」

その国のお世辞にもスポーツマンシップに従っているとは言えない行為も言及された。

「あれも酷かったな」

「つていつか俺あれネットで知ったぞ」

「俺もだ」

つまりマスコミでは報道されていないのだった。

「特にこの番組なんてな」

「自分に都合の悪いこと報道しないからな」

「つていつか農薬のこと謝罪したか？」

「いいや」

このこともネットにおいて有名になっていた。この番組において野菜の農薬のことが言われたがこれは科学的知識に基くものではない誤報だった。一説には虚報だとも言われている。

「あれで農家の人かなり迷惑したんだけれどな」

「俺の家農家だったよ。洒落にならなかったぜ」

「やっぱりそうか」

「つていつかあれで柔が大嫌いになった」

「こつも書く人がいた。」

「あいつ等のせいだよ。家潰れるところだったんだよ」

「何だよ、じゃあこいつ等権力者じゃねえか」
「なあ」

このことが指摘された。

「しかも責任全然取らないしな」

「マスコミって責任取らないぞ」

このことも言われた。

「戦争中からずっとな」

「ずっとかよ」

「で、今だってそうなんだよ」

「けれどあいつ等他人の責任には五月蠅いよな」

「そうだな」

マスコミの役目は社会の木鐸と言われる。もっとも今ここに書きこんでいる人間は誰もそんな言葉は全く信じてはいないのであるが。

「で、自分のことはおざなりかよ」

「マジ最悪だな」

「しかし巢型の奴」

今度は巢型について書かれた。

「相変わらず物凄い偉そうだな」

「何様だ？こいつ」

巢型に対しても嫌悪感が止まることはなかった。

「自分が一番偉いつて顔してるよな」

「っていうか権力者だからだろ？」

マスコミが権力者だという指摘もまた書かれた。

「それ自覚してるんじゃない？」

「確信犯かよ」

この二人について書かれるだけではなく古宮についても同じであった。やはりその高飛車、いや傲慢な態度が書かれているのだった。

「古宮もな。あの国ばかり応援してるよな」

「日本人じゃねえだろ」

「だよな」

「手前の脚なんかもう誰も見ねえよ」

古宮がいつもミニスカートなのも言われた。

「婆の脚なんてよ」

「早くテレビから消えろよ」

こうした書き込みが続いた。こうした声は少しずつだが次第に広がっていった。そしてこれが決定的になった事件がここで起こったのだった。

この番組のテレビ局や親会社の新聞社が常にえこひいきしているある国が日本で覚醒剤を売り、また破壊工作を行っていたことを自分達から明らかにしたのである。これが問題にならない筈がなかった。

このことは常に囁かれていた。しかしこの新聞社やテレビ局はこれを捏造だと切り捨てていた。ところが自分達から事実だと認めた。これはかなり大きかった。

「やっぱりやっていたのかよ」

「マジテロ支援国家だったんだな」

「犯罪国家じゃねえか」

ネットでは早速話がそれ一色になった。この国は犯罪者国家ということが明らかになった。そしてその批判は彼等を支持していた者達にも及んだであった。

このテレビ局も新聞社も完全にテロ支援国家の仲間、グルだと認定された。当然ながらニュース番組も批判の的となった。流石にこの自白は報道せざるを得ず止むを得なくだが報道した。しかしこれで彼等がネットでの批判を逃れられるかというところはならなかった。

第三章

「おい、麻薬売ってたんだぞ！」

「それで済むか！」

「ちゃんと擁護していたことを謝罪しろ！」

ネットだけでなく抗議の電話や手紙も殺到し騒ぎは大きくなる一方だった。最早この新聞社もテレビ局も信頼は地に落ちその発言は全く信用されなくなった。このこともまたこの番組に影響し視聴率は暴落し衆達への批判も爆発的に増えた。そしてこんな時だった。

巢型が問題を起こしたのだ。しかも女性問題である。彼の愛人がある週刊誌にその関係や些細なことまで告白したのである。これで巢型は完全に終わった。

「偉そうに言っていてそれかよ」

「モラル！？変態野郎が言うな」

「バナナって何だよバナナって」

批判どころか嘲笑になっていた。

「愛人相手によ」

「そのまま流されて失脚しろってんだ」

こう嘲笑されたがこれは本当に彼の失脚につながった。新聞社内でも問題になり孤立し挙句にはこの番組からも降板し窓際に追いやられることになった。以後彼は新聞社内でも家庭でも誰にも相手にされない孤独で惨めな余生を送ることになったのだった。

巢型の失脚は当然ながらこの番組の視聴率にも影響した。スキヤンダルが影響するのは常だがこの番組も例外ではなく落ちたのだ。そして間の悪いことにまた事件が起こった。

今度は簡単に言うなら自爆であった。それも報道番組としても資格を問われるような。それは。

ある食品の偽装事件で野証言者だがこれはその偽装事件を起こした会社の人間ではなくこの番組で使っている芸能事務所の新人タレ

ントだったのだ。つまり偽装の証言者を捏造したのである。

これははつきりと言えば詐欺行為であった。こちらの方こそ偽装事件と言うべきものであった。当然ながらこれはネットで大騒ぎになり週刊誌にも取り上げられた。

「ふざけるな、御前等それでも報道番組か！」

「報道の看板おろせ！」

「何処の独裁国家のプロパガンダだ！」

こうした批判が噴出した。番組への抗議電話が二十四時間鳴り響いた。

これで流石に懲りたのは古宮が謝罪した。衆はこの時はたまたま休みだった。

しかし問題は続く。今度は沖縄での市民集会だがこの番組はここでもまたやらかしたのだ。何と集会に集まった人間の数を誇大に言っていたのだ。

白髪三千丈という言葉があるがそれとはまた違うのはこの番組は放送でこれだけ市民の怒りが集まった、と主張していたからだ。もっともこの集会にしる所謂プロ市民という素性がかなり怪しい連中が主導していたものであるという指摘がネットで証拠と一緒に述べられていたが。

「数の問題ではありません」

古宮は言った。やはりここでも衆はいなかった。しかし古宮のこの開き直りそのものの発言はまた騒ぎになった。丁度彼女自身も男性問題を噂されていてそれも言われまたしてもこの番組はネットや週刊誌、それに総合雑誌から集中的な批判を浴びたのであった。

『最早報道番組ではない』

『只のプロパガンダだ』

『視聴者をペテンにかけろ悪質なデマコング』

こうまで書かれる始末だった。こうして古宮も終わった。彼女も降板し以後はテレビから徹底的に干されることになった。残るは一人であった。

巢型と古宮の代わりは毒にも薬にもならない人間だった。彼等は特に槍玉に挙げられることはなかったが糸は別だった。その野菜の問題への批判が続いていたのである。

残る最後の一人となった糸への批判は凄まじいものであった。最早孤立無援となった彼は遂に謝罪に追い込まれた。ところがこの謝罪がまた傑作であった。

「おいおい、何だよそれ」

「それが謝罪か？」

またしてもネットで批判されることになった。何と彼は頬杖をついて謝罪したのである。

「幾ら何でもその謝罪はないだろ」

「全然誠意がないな」

「悪いと思っていないんだろ」

掲示板でもブログでも次々に書かれた。

「幾ら何でもそりやないわ」

「他人には謝罪しろ謝罪しろって言っわりにな」

「自分はそれかよ」

「本当に屑だな」

批判は呆れ果てたものだった。そしてこれがやがてこの番組の止めを刺すことになった。

批判者達は非常手段に出た。何と番組のスポンサーに電話したのである。この番組の偏向と捏造、それにキャスター達の問題を。これは確実に効果があった。

これによるスポンサーも離れた。視聴率はさらに下がった。こうして番組は批判だけがあり賛同者も信じる者もいなくなった。そしてその果てにあったのは。

打ち切りであった。長く続いたこの番組も遂に終わることになった。糸はすくすくテレビの前から姿を消し以後その力を見る影もなくなってしまった。

これがこの番組とニュースキャスター達の末路であった。彼等は

今までの偏向と捏造の責任を無理矢理取らされた。だが問題はそれがネットが発達するまではほぼ野放しだったことだ。彼等はその行いに相応しい惨めな末路を迎えた。しかしそれ以前に誰かが問題点を指摘し一刻も早くどうにかするべきであったのだろう。そうした存在がなかったことこそがこの話の最大の問題ではなкаろうか。だがこれへの答えは誰も答えられなかった。

ニュースキャスター

完

2009・1・7

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2815g/>

ニュースキャスター

2010年10月8日15時20分発行